

「態度 挨拶 学ぶ意欲 No. 1」の修学旅行

11月19日、20日の2日間、6年生が東京に修学旅行に行ってきました。「態度 挨拶 学ぶ意欲 No. 1」を合言葉に、国会議事堂、江戸東京博物館、東京スカイツリーなどへ行きました。全員元気に参加し、首都東京を「見て、聞いて」学びました。時間を守るなどの約束もしっかりと守り、思い出深い修学旅行になりました。



本気と絆を歌声に乗せて

掛川市内の小中学校が参加して開催される音楽発表会、「キラリ！ふれあいコンサート」に4年生が出演しました。6月ごろから発声練習を始め、音楽の時間や放課後などに練習を重ねてきました。当日は、生涯学習センターのホールに美しい歌声を響かせました。4年生の本気の姿が発揮されました。



当日、学校で最後の練習

【審査をされた先生の寸評】

- ・聞いている人に届けたい思いがしっかり伝わってきました。リズムに乗り、声と言葉と思いをしっかり乗せて歌えましたね。美しいハーモニーと思いのこもった演奏をしようと、本当に頑張ってくれました。ありがとう。
- ・高音がきれいですね。ユニゾンからコーラスに入るところが実に音程がよく、気持ちよく聞くことができました。

こちらSNE相談室

※ SNE : Special Needs Education
(特別支援教育)

「羹に懲りて膾を吹く」…「あつものにこりてなますをふく」と読むんですね。「羹」、「膾」、私はとても読めません。今回は「諺」、おっ、漢字に変換されてしまった…「ことわざ」のお話です。

世の中にはいろいろな「諺」がありますが、調べてみると逆の意味合いを持つ「諺」がたくさんあります。例えば…「善は急げ」に対して「急がば回れ」、「犬も歩けば棒に当たる」に対して「果報は寝て待て」、更には「大は小を兼ねる」に対して「山椒は小粒でもぴりりと辛い」等々。これが日本だけの話かと思うと、英語の「諺」に「Seeing is believing」(日本語で言えば「百聞は一見にしかず」)とあるにも関わらず、サンテグジュペリは「星の王子様」の中で「What is essential is invisible to the eye.」(大切なものは目に見えないんだよ。)と著しています。僧侶であり芥川作家である玄侑宗久氏は、著書「日本人の心のかたち」のなかで、これらのことを「一見、迷わせるかと思える諺の両行だが、じつは逆に初動の後に迷いを生じないためであったのである。ただしどうしても初めの判断が通せなくなった場合、逆の判断がし直せるよう、反対のことを告げる諺が用意してある。」と述べています。

子育ての中で、「覆水盆に返らず」と教えていくことは大切ですが、「羹に懲りて膾を吹く」ようになってしまっただけではいけません。特に失敗に弱い子は、「石橋を叩いて渡る」どころか、叩いて壊してしまい、どうにもならなくなって、自己肯定感を下げたままを繰り返してしまいます。それを避けるためには、「失敗は成功のもと」と教えていくことも大切ですね。うまくいってもいなくても、子どもたちを肯定し、背中を押してあげられる言葉掛けを大切にしていきたいものです。



(特別支援教育コーディネーター：田中和彦)